

州山脈の山々を望む豪壯な眺めは、けだし九州の絶景の
必に恥じぬものである。

私が高宗台地に一麓の御慈親近慮を抱くものであるが、
佐伯地方では此の景観に接することは出来ない。古代人
は不健康地であり、瘴氣毒虫等々害の多かつた低湿の地
より、かろりとて快適な高宗に居を定めることが多
かつたと云われている。

高千穂の遺跡は神話と伝承にもとづくものであるが、
高天原といひ、天孫降臨の地といひ、いざれも高宗であ

俳句

借方、竹田、高千穂へ

会友 吉田長良子

鳴り落へる飛瀑にオイヤカラ思ふ

龍の上にしまくしぶきの巻き上る

浅なる水根を洗う楠柳

荒城の月の城址の木は芽か交

春日の城壁に佇ち遠き世を

洞窟のヤリ礼拝堂、茂き春

軍神のカタター古うて春寒し

筆塚にからまる葛の芽はいまた

漸出るも入るもトンネル水々芽ぐま

山焼きの煙にかすむ柑藪のそむ

赤黒野へ行くらし赤き牛親子

既穴に浸める溪の水温む

峡谷の深きに春の日は射さず

絶壁の空春日の薄曇り

茶の花も干水道く納屋に耕耘機

屋根替の男は屋根を叩きをり

屋根替の女青草嘆き上ぐる

神杉は神令八百木下朝

岩戸社の神代銀杏芽吹きそむ

記録

海福寺から高畑を歩く

四月定期訪問史談会

四月五日快晴(土曜)午後二時 福岡小學校に集

会、定時海福寺を訪問。

登り道は左側に見える。寛文、延宝、元禄の年号の
ある古の墓にしばしば、会友の足かきとまる。

つたと思われ。高天原が雲の上でなく、当時の文化の
中心地と意味したことは定説である。高千穂の地は古
から人猿居住の通地として、風光絶佳の峡谷と共に聞け
ていたことは否定出来ない所である。(以上)

- 御案内者
- 竹田市 北井清士先生
 - 高千穂 沢武人先生
 - 高千穂 高千穂 沢武人先生

- (参考者)
- 平田幸一 加藤健一 羽柴
 - 山本正直 西野房子 隆久 勘
 - 若杉吉洋 老田雅雄 高木夫人
 - 河野英一 休石博美 伊藤重雄
 - 平川 繁 岩田正城 氏久 捨夫
 - 高木嘉吉 岩田善市 五十川代見
 - 小野英治

左様、梅上の梵鐘などといひにいれる。幸い今日日田
中任職も居られ墓池を参詣していきなむ。

一四日書院に招かれ、茶宴をいいたきながら、お寺の
歴史と伺ひ、遠代法法律律祖名號とを見しする。法燈は
いまでも嶺かに守りつづけてあることを伺ひ、仏教伝
統の厳肅さに心をうたれる。又歳長と年以來の過激
も鮮見する。知つた人も、戒名も改年とを女の方につか
へてみる。

お寺を辞して星宮神社に上り、更に坂山の般若院お
どの小まなわ堂に不無明王と観音さまの木彫像とを科す
る。先刻お寺で見た浸衣帳の字の権大徳都宗院院縁心
(空承文書)にかりりよそおておんうか。

高畑(左は左)ではまず大庄屋おと津矢家墓
地を訪ひ、小田井堀潤さの恩人陸奥陸奥、その他歴代
大庄屋のお墓としらへ、その墓誌銘を讀む。此一時
向がなくて、採録の余積はない。

津矢家を訪ひその広い庭園を科見した。数生の桜
は五分咲き、樹石もびくびくおかく、谷水が引いた泉水
の中は巨きな緋鯉が悠遊と泳いでいた。

このお寺は昔の下野村で、こゝ津矢家は日州耳川家
の降矢根記の跡、大正とて、左家である。
(おそくなつた下野は日田に成りこいて解散)